

巻頭言

「情報メディアの利用形態と課題」小特集号に寄せて

高田 達雄



私は電気及び通信工学を学生時代に勉強したので、なぜ瞬時に地球の裏側にいる人と通信ができるかを通信技術の点から理解できる。電磁波が空气中を伝搬すること、光(電磁波)がガラスファイバー中を伝播すること、また電磁波が電線のまわりを伝搬することを理解できる。そこで、「環境」と「情報」の根幹は電磁波の恩恵と利用であると捉え、電磁波を理解することは大切であると考え、本学部の全学生に電磁波モデルを制作させ教えている。しかし、学生には難解のようだ。なんとかして興味を持ってもらい、理解できるように教え方を編み出したいと考えている。

さて、本学部は、地域に開かれた大学の一環として、横浜市が主催する横浜市民大学講座に積極的に参画し、本学部において毎秋、講座を開催してきた。2002年4月の情報メディア学科の開設を契機に、第4回目となる昨年秋には、「つくられた情報社会から、つくる私たちへ」と題して、情報の発信と受信について、様々な角度からの講義と討論を行った。すなわち、マスメディアによる情報の作られ方、個人による情報発信、携帯やインターネットなどを介した新しい情報コミュニケーション、情報の保護、正しい情報の見分け方などである。このうち、情報メディアの利用形態に関する論文6編と解説1編が、本ジャーナル第4号の小特集として掲載されている。

この講座では、これからは、情報は「与えられるもの」だけではなく、市民自ら、積極的に「情報」を検証し、同時に積極的に発信もしていく必要性が語られている。社会を構成する市民による「情報への参加」である。どのように参加するか、それを専門家は「情報の参加デザイン」というようである。

このキーワードが、情報メディア学科の教育に重要な役割を果たすものと考えられる。実は、本ジャーナル第2号に上野直樹氏の論文が掲載されているが、彼の論文の中に「参加デザイン」の考え方が説明され、この教育が重要であると説いている。例えば、学校の建築デザインを考える際に、学校建築の専門家と学校の教師間のコミュニケーションはなかなか成立しない。建築の専門家が教師に「どういう学校のデザインが良いですか」と聞いてもほとんど何も答えられない。一方、建築の専門家は学校で子供たちがどのような活動をしているかをあまり知らないし、それを知る方法を持っていない。建築の専門家と学校の教師がコミュニケーションするための適切なツールや方法論が欠けている。そこに「情報の参加デザイン」が必要になるのであると記述されている。

数学や理科が嫌いになる生徒が沢山いることをよく聞くが、その教科書は先生達だけが集まってどのように数学や理科を教えれば良いのかを議論して教科書を作っている。生徒と一緒に参加して教科書をデザインしたらどうか。また現在、原子力発電の建設や運転停止が問題にされているが、これからは専門技術者と住民や電気消費者と一緒に参加して原子力発電をデザインする時代が来るのではないか。このような例は商品企画、商品販売など他にいくらかもある。そこに、カラー映像、立体画像、動画、音声、説明文章、検索など最新のITツールを駆使した、「情報の参加デザイン」の研究が必要になるのではないか。生産者と消費者、販売と顧客、教師と学生、行政と住民などの間で相互理解を得る過程で、「情報の参加デザイン」の手法が明らかになっていくであろう。この基本原理とプロセスに関する教育と研究がどんどん広がって行くことを期待したい。本学部では、本年9月28日(日)と29日(月)の両日にわたり、「情報の参加デザイン」の国際シンポジウムを開催する予定である。

このように考えると、冒頭に述べた「電磁波がエネルギーを運んでくる」ことを理解できる教材開発に、参加デザインの手法を取り入れ、学生と教員が一体となって教材をデザインすれば、楽しく容易に理解できる教材が開発されるのではないだろうか。